

コピュラ文の二つの倒置

平塚 徹

1. はじめに

コピュラ être を含む文の語順としては、〈主語+コピュラ+属詞〉という通常の語順の他に、(1)や(2)のような〈属詞+コピュラ+主語〉型の倒置と、(3)や(4)のような〈コピュラ+属詞+主語〉型の倒置が可能である¹⁾。

- (1) *Nombreux sont les mammifères qui hibernent, surtout parmi les rongeurs: marmottes, loirs, hamsters, ...*
(*Science illustrée*, février 1993, p. 8)
- (2) *Plus toxique encore est la vitamine D, dite "antirachitique".*
(*Science illustrée*, mai 1993, p. 5)
- (3) *Est correct ce qui correspond à la norme établie par la collectivité*
(cité dans LE BIDOIS, p. 26)
- (4) *Est membre de la société civile celui qui n'est pas un politicien professionnel.* (YAGUELLO, *En écoutant parler la langue*, p. 29)

〈属詞+コピュラ+主語〉型の倒置文においては、属詞が(1)のように量を表す形容詞であるものや、(2)のように比較級であるものが多い²⁾。平塚(1996)では、このタイプの倒置文が、主語の指示対象を談話内世界に導入するものであることを主張した。以下、属詞が量表現や比較級である〈属詞+コピュラ+主語〉型の倒置文を、主語属詞倒置構文と称することにする³⁾。これに対して、(3)や(4)のような〈コピュラ+属詞+主語〉型の倒置文を、主語述語倒置構文と称することにする。本稿は、両構文の振る舞いを比較し、機能上の相違を明らかにすることを目的とする⁴⁾。

2. 否定

主語属詞倒置構文は、以下の例に見るように否定できない。

- (5) a. *{Nombreux/Rares} sont ceux qui suivent le cours de linguistique.*
b. **{Nombreux/Rares} ne sont pas ceux qui suivent le cours de linguistique.*
- (6) *L'héroïne est donc très dangereuse.*

a. Mais, aussi dangereuse est la cocaïne: ...

b. *Mais, moins dangereuse n'est pas la cocaïne: ...

平塚(1996)では、主語の指示対象を談話内世界に提示するという主語属詞倒置構文の機能が否定と矛盾することから、このことを説明した⁵⁾。

これに対して、主語述語倒置構文には、否定文の実例が存在する。

(7) N'est pas littérature tout ce qui est écrit (cité dans LE BIDOIS, p. 27)

LE BIDOIS (1952)によると、このような倒置文では、否定は動詞ではなく、主語に掛かっており、(7)は(8)のように言い換えることができる。

(8) Ce n'est pas tout ce qui est écrit qui est littérature

(cité dans LE BIDOIS, p. 28)

この言い換えから、否定されているのは、主語の指示対象の存在ではないことが分かる。むしろ(7)は、「文学であるもの」が「書かれたもの」と一致しないと言っているのである。よって、主語述語倒置構文は、肯定文の場合には、主語の指示対象の存在を言っているのではなく、属詞で形容することができるものが主語の指しているものと一致することを言っているのではないかと考えられる。例えば、(3)は、「correctであるもの」とは何かというと、「集団によって確立された規範に合致しているもの」だと述べていると考えられる。このようにあるものが別のものと過不足なく一致すると述べることを「同定」と言うことにすると、主語述語倒置構文の機能は、属詞が表す属性が当てはまるものを主語の指示対象で同定することだと言える。

以上より、主語述語倒置構文が否定できることは、この構文が主語属詞倒置構文と異なり、主語の指示対象を談話内世界に導入する提示構文ではないので、否定しても機能的に矛盾を生じないためと説明できる。

ところで、主語属詞倒置構文と主語述語倒置構文は、両者とも主語を文末に持ってきて焦点化していると考えられる⁶⁾。主語属詞倒置構文の場合は、主語の指示対象を提示しており、それゆえ主語が焦点となっている。主語述語倒置構文の場合は、(7)で否定が主語に掛かっていることから、主語が焦点であると考えられる⁷⁾。よって、主語を焦点化するかどうかということに関しては、この二つの構文は異なっていない。そのため、両構文の相違を説明するためには、主語属詞倒置構文が主語を提示するのに対して、主語述語倒置構文は属詞の表すものを主語で同定するという特徴付けを行う必要がある。このことは、以下で見ていく両構文の他の相違点についても当てはまる。

3. 属詞

主語属詞倒置構文の属詞は量表現ないし比較級であるが、このような属詞は主語述語倒置構文では不自然である。例えば、量を表す形容詞 nombreux を属詞とす

る主語属詞倒置構文である(9a)に対して、同じ形容詞を属詞とする主語述語倒置構文である(9b)は不自然である。

(9) a. *Nombreux sont les enfants qui croient aux OVNI.*

b. **Sont nombreux les enfants qui croient aux OVNI.*

主語述語倒置構文は属詞で形容できるものを同定するので、(9b)は「多いものは何か」というと、それはUFOを信じる子供たちだ」と言っていることになる。しかし、「多い」ということだけでは、それに当てはまるものを「UFOを信じる子供たち」だと同定するには、余りにも漠然としすぎている。そのため、(9b)は不自然になると考えられる。

属詞が比較級の場合にも、主語述語倒置構文は不自然になる。

(10) *Le grec est très difficile.*

a. *Mais, plus difficile est le sanskrit.*

b. **Mais, est plus difficile le sanskrit.*

(10b)は、「(ギリシャ語)より難しいもの」を同定していることになる。しかし、「(ギリシャ語)より難しい」ということだけでは、それに当てはまるものを同定するには漠然としすぎているため、不自然になると考えられる。

このように、属詞に関する相違も、主語属詞倒置構文が提示を機能としているのに対して、主語述語倒置構文が同定を機能としているということから説明できるのである。

4. 数量詞 tout

主語述語倒置構文の実例を観察すると、しばしば、主語が数量詞 tout を伴っている。例えば、(11)では、数量詞 tout が、〈tous+限定辞+名詞+その他〉というパターンで現れており、「全ての」という意味で使われている。

(11) *Sont électeurs en principe tous les citoyens français âgés d'au moins vingt et un ans (cité dans BLINKENBERG, p. 56)*

また、上掲の(7)でも、やはり「全て」という意味で使われている。一方、(12)では、数量詞 tout が、〈tout+名詞+その他〉というパターンで現れており、「あらゆる」という意味で使われている。

(12) *Il semble donc que le langage affectif, ou expressif, ... soit facile à définir: serait expressif tout fait de langage associé à une émotion (cité dans LE BIDOIS, p. 27)*

これに対して、主語属詞倒置構文では主語が数量詞 tout を伴うことはない。まず、量を表す形容詞を伴う場合は、この形容詞自体が数量詞 tout と相容れない。

(13) **Tous mes amis sont nombreux. (RIEGEL, p. 147)*

これは、RIEGEL (1985) も述べているとおり、形容詞 nombreux が主語が指す集合

を特徴づけるタイプの述語であるのに対して、数量詞 *tout* が集合の各要素に述語が当てはまることを示す配分的な操作を表しているからである。このため、量表現を含む主語属詞倒置構文に数量詞 *tout* が付加できるかどうか問うことには意味がない。

次に、比較級を含む主語属詞倒置構文について考える。比較級自体は、数量詞 *tout* と相容れないということはない。例えば、(14)において、主語に数量詞 *tout* を付加しても不適格にはならない。

(14) { \emptyset /Toutes} les baleines sont plus grandes que les éléphants.

ところが、比較級を含む主語属詞倒置構文においては、主語に数量詞 *tout* を付加すると不自然になる。

(15) Les éléphants sont très grands.

Mais, plus grandes sont { \emptyset /*toutes} les baleines.

これは、数量詞 *tout* が、本来、存在を述べる文とは機能的に相容れないせいでと考えられる⁸⁾。事実、「全ての」という意味のいわゆる普遍数量詞が存在を表す文と相容れないということは、MILSARK (1979) が英語の存在文である *there* 構文について観察している⁹⁾。

(16) *There are all dogs in the room. (MILSARK, p. 195)

以上から、主語述語倒置構文では数量詞 *tout* がよく現れるのに、主語属詞倒置構文では数量詞 *tout* が不自然なのは、前者が属詞の表す属性が当てはまるものを主語で同定する構文であるのに対して、後者が主語の指示対象を提示する構文であるからと言える¹⁰⁾。

5. 限定の表現

主語述語倒置構文には、LE BIDOIS (1952, pp. 28-29) が観察しているとおり、しばしば主語を限定する表現が現れる。例えば、(17)では *ne ... que* が、(18)では *seul* が主語を限定している。

(17) N'est créatif que ce qui est novateur.

(*Science illustrée*, juillet 1993, p. 42)

(18) Seuls sont pertinents le nombre et l'agencement des arguments.

(*Langue française* 69, p. 26)

主語述語倒置構文の機能は、属詞が表す属性が当てはまるものを、主語の指示対象に同定することである。ここで同定するとは過不足なく一致すると述べることで、いわゆる総記の含意が生ずる。よって、主語を限定することは、同定するという機能と合致しており、そのため主語を限定する例が多く見られると考えられる。

これに対して、主語属詞倒置構文には主語を限定している例が見られない。そこ

で作例を作ってみたところ、主語を限定した主語属詞倒置構文は不自然であった。

- (19) a. *Nombreux sont les enfants qui croient aux OVNI.*
b. **Nombreux ne sont que les enfants qui croient aux OVNI.*
- (20) *Le grec est très difficile.*
a. *Mais, plus difficile est le sanskrit.*
b. **{Mais/Et}, plus difficile n'est que le sanskrit.*

存在を述べることに限定することは、例えば、*il y a* の名詞句を *ne...que* で限定した(21)のような文が可能なことからも、基本的に矛盾していないと考えられる。

- (21) *Il n'y avait qu'un seul moyen praticable à cet effet (cité dans GREVISSE, *Le bon usage*, §978)*

そのため、主語属詞倒置構文が提示文であるということだけでは、なぜ限定表現が不自然なのか説明できない。本稿では、以下のような説明を提案するにとどめる。

先ず、*ne...que* である要素を限定した場合、その要素に関しては命題が成立することを述べると同時に、その他の要素に関しては命題が成立しないことを述べることになる。(21)だと、「方法が一つ存在するが、その他には方法が存在しない」と言うことになる。この場合、前半の「方法が一つ存在する」も、後半の「他に方法は存在しない」も、存在・非存在を述べている。しかし、(19)では、「UFOを信じる子どもが多い」と言うのと同時に、「その他のものは多くない」と言っていることになる。また、(20)では、「ギリシャ語より難しいものとしては、サンスクリットがある」と言うのと同時に、「他の言語はギリシャ語より難しくないと」言っていることになる。これらの言い換えで、後半の否定の部分、すなわち「その他のものは多くない」とか、「他の言語はギリシャ語より難しくないと」という部分は、存在・非存在を述べていると言うよりは、主語の指示対象以外のものについて叙述を行っていると考えられる。そこで、この部分が提示機能と矛盾するために、不自然になると考えられる。

6. まとめ

平塚(1996)で主張したように、主語属詞倒置構文は主語の指示対象を談話内世界に導入するという提示機能を果たしている。このことから、否定できないことや数量詞 *tout* を主語に付加できないことが説明される。他方、主語述語倒置構文は属詞の表している属性が当てはまるものを主語の指示対象で同定するという機能を果たしている。このことから、否定できること、量表現や比較級を使えないこと、数量詞 *tout* を主語に付加できること、しばしば主語を限定する表現が使われることが説明される。

(京都産業大学)

[注]

*). ネイティブチェックに快く応じてくださった京都産業大学ならびに京都大学の教官の方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。

1) ここで属詞としては、形容詞句や名詞句から限定辞を除いたもの(変形文法の X'理論の言い方を借りれば AP や N' に相当するもの)を想定している。よって、(a) や (b) のようなコピュラ文は本稿の考察からは除外される。

(a) Horatio est le meilleur ami d'Hamlet. (RUWET, p. 207)

(b) Le meilleur ami d'Hamlet est Horatio. (*ibid.*)

また、(c) のような受動態は〈コピュラ+属詞+主語〉型の倒置文とは見なされない。

(c) De l'autre côté est installé un détecteur. (*Science illustrée*, septembre 1996, p. 56)

2) この点に関しては、NORDAHL (1973) を参照されたい。

3) 〈属詞+コピュラ+主語〉型の倒置文としては、他に (a) のように情意的な倒置文(平塚(1996)の注2を参照)や、(b) のように属詞が形容詞 *tel* である倒置文がある。

(a) Naïfs sont ceux qui croient à l'astrologie.

(b) Tels sont les étudiants d'aujourd'hui.

これらの倒置文を主語属詞倒置構文と区別する根拠としては、注5や注9で言及した観察を挙げることができる。

4) これらの倒置文に関する先行研究としては、BLINKENBERG (1928), LE BIDOIS (1952), NORDAHL (1973), JONARE (1976), SAVELLI et CAPPEAU (1993) がある。

5) これに対して、同じ〈属詞+コピュラ+主語〉型の倒置文でも、属詞が形容詞 *tel* の場合は、否定が可能である。

Tel n'est pas le cas ici. (VANDELOISE, *L'espace en français*, p. 193)

このことは、〈*tel*+コピュラ+主語〉型の倒置文が、主語属詞倒置構文と機能的に異なっていることを示唆するものである。

6) 主語倒置が主語を焦点化する統語的手段であるという考え方については、東郷・大木(1986)を参照されたい。

7) 第5節で見るように、主語述語倒置構

文の主語がしばしば *ne...que* や *seul* によって限定されることから、主語が焦点であると考えられる。

8) 但し、(15) と同じ文脈では正置でも許容度がやや低下する。

Les éléphants sont très grands.

Mais, {ø/toutes} les baleines sont plus grandes.

これは、文脈のせいで、正置文でも主語の指示対象の存在を導入しているという解釈が優勢になるためと思われる。

9) MILSARK は、定冠詞を伴う名詞句も存在文と相容れないことから、これも普遍数量詞としている。

(a) *There is the dog in the room. (MILSARK, p. 195)

しかし、定冠詞付きの名詞句が存在を述べる文と相容れないとすると、主語属詞倒置構文はしばしば主語が定冠詞を伴うので、存在を述べる文ではないことになってしまふ。しかし、HOLMBACK (1984) が示したとおり、直前の文脈とは独立に指示対象が確定すれば、存在文に定冠詞付きの名詞句が現れることができる。例えば (b) は、名詞句の指示対象が前の文脈なしでは確定しないので、不自然になる。

(b) ?There is the lunatic in the closet. (HOLMBACK, p. 209)

しかし、(c) は、関係節による修飾のおかげで、前の文脈とは独立に名詞句の指示対象が確定するので問題ない。

(c) There is the lunatic who attacked Sue in the closet. (*ibid.*)

つまり、提示文で提示される名詞句は定冠詞を伴っていてもよいのだから、主語属詞倒置構文が提示文であるという主張に問題は生じないのである。

10) 同じ〈属詞+コピュラ+主語〉型の倒置文でも、情意的な倒置の場合や、属詞が形容詞 *tel* である場合は、主語に数量詞 *tout* を付加することが可能である。

(a) Naïfs sont {ø/tous} ceux qui croient à l'astrologie.

(b) Tels sont {ø/tous} les étudiants d'aujourd'hui.

このことは、情意的な倒置文や *tel* を含む倒置文が、主語属詞倒置構文とは機能的に異なっていることを示すものである。

[参考文献]

- BLINKENBERG, A. (1928) *L'ordre des mots en français moderne*, Première partie, Munksgaard, Copenhagen.
- 平塚徹 (1996): 「〈形容詞句+繫辞+主語〉型の倒置構文」, 『フランス語学研究』 30, pp. 27-33.
- HOLMBACK, H. (1984): "An Interpretive Solution to the Definiteness Effect Problem", *Linguistic Analysis* 13, pp. 195-215.
- JONARE, B. (1976) *L'inversion dans la principale non-interrogative en français contemporain*, Uppsala.
- LE BIDOIS, R. (1952) *L'inversion du sujet dans la prose contemporaine (1900-1950)*, Editions d'Artrey, Paris.
- MILSARK, G. (1979): *Existential Sentences in English*, Garland, New York.
- NORDAHL, H. (1973): "L'antéposition de l'adjectif attribut en français moderne", *Studia neophilologica* 45, pp. 115-123.
- RIEGEL, M. (1985): *L'adjectif attribut*, Presses Universitaires de France, Paris.
- RUWET, N. (1982): *Grammaire des insultes et autres études*, Seuil, Paris.
- SAVELLI, M.-J. et P. CAPPEAU (1993) "Deux paradigmes de l'attribut", *Recherches sur le français parlé* 12, pp. 59-83.
- 東郷雄二・大木充 (1986): 「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」, 『フランス語学研究』 20, pp. 1-15.